

倫理学の体系化と統一思想

増田善彦、Ph.D.

副教授 / 倫理神学

鮮文大学校 神学大学院

目次

緒論

I. 統一思想の倫理論の再体系化

1. 『統一思想要綱』の倫理論の極東文化的特徴
2. 統一思想の倫理論の包括的な体系化の為に

II. 倫理学の分類

1. 内容の性格による倫理学の分類：メタ倫理学と規範倫理学
2. 善悪決定の方法論による倫理学の分類
3. 主題分野による倫理学の分類
4. 研究者達の類型による倫理学の分類

III. 統一思想の観点から見た倫理論の評価

1. 統一思想の観点から見た目的論的倫理論
2. 統一思想の観点から見た義務論的倫理論
3. 統一思想の観点から見た結果論的倫理論
4. 統一思想の観点から見た状況倫理論
5. 統一思想の観点から見た人格倫理論
6. 統一思想の観点から見た道德律廃棄論的倫理論

IV. 結論：倫理学に対する統一思想の関連性

参考文献

* この論文は、2002 年度、鮮文大学統一思想研究院の支援を受けた。

緒 論

この論文は、統一思想の倫理論の観点から、倫理学の分野を体系化しようと試みるものである。¹⁾ 統一思想の観点から倫理学という学問分野全体を体系化しようとすれば、倫理学の多様な下位分野や各種倫理論を分類出来なければならないと同時に、多様倫理論の観点とそれらの倫理論間の相互関係を統一思想の立場から明確化しなくてはならない。しかし筆者の見解では、統一思想の観点から西洋における倫理学の学問分野全体を体系化しようとするならば、統一思想の倫理論をさらに包括的に体系化しなければならないと見る。『統一思想要綱』の倫理論は、西洋において論じられている全ての倫理学の分野と理論を扱うためには、十分に包括的ではない面がある。²⁾ しかしたとえ現在、統一思想の倫理論が、西洋における倫理学全体を体系化するためには多少不足な点があるとしても、『統一思想要綱』、『原理講論』³⁾、『文鮮明先生の御言集』⁴⁾の中には、倫理学分野、特に神学的倫理学を引導し明確化し体系化するために必要な素晴らしい資源が入っているということには確信をもっている。

したがって、まず第一セクションでは、全ての倫理学の下位分野と倫理学諸理論を取り扱うことが出来るように、『統一思想要綱』、『原理講論』、『文鮮明先生の御言集』を用いて、統一思想の倫理論を再度体系化することを試みる。すなわち、『原理講論』に定義されている中心的な善と“三大祝福”の観点から、倫理論をもう一度体系化して、人間と万物の間の理想的な関係を扱う“環境倫理”などの下位分野を統一思想が定義する倫理学の枠内に存在していると見る事が出来るようにする。

次に二番目のセクションでは、倫理学の内容の性格、善悪決定の方法論、主題分野、そして研究者達の類型に従って倫理学分野を分類する。三番目のセクションでは、最も深刻な意見の分裂が存在するのは、善悪決定の方法論の分野であるので、善悪決定の方法論的な相違によって区別されている主要な各種倫理論を紹介し、それらの倫理論の相互関係と有効性を統一思想の観点から評価する。この論文で検討する主要な倫理論は、目的論的倫理論、義務論的倫理論、結果論的倫理論、状況倫理論、人格倫理論（または徳目倫理論）、道徳律廃棄論的倫理論である。結論部分では、倫理学分野に対する統一思想の関連性・妥当性を評価する。本論文は、統一思想が、目的論的倫理論、結果論的倫理論、人格倫理論を基本的に支持し改善することができるということと、道徳律廃棄論的倫理論の衰亡を促進するであろうということを主張する。

I. 統一思想の倫理論の再体系化

この第一セクションでは、まず『統一思想要綱』の倫理論に提示されている極東文化的特徴を要約することから始める。次に西洋における倫理学分野全体を体系化するのに欠点となるものが何かを指摘し、『原理講論』と『文鮮明先生の御言集』を土台に、統一思想の倫理論をもっと包括的に再度体系化することができる新しい方法を提示しようと思う。

¹⁾ この論文において、“『統一思想要綱』の倫理論”は、現在の『統一思想要綱』に記述されている倫理論を意味する。反面、“統一思想の倫理論”は、『統一思想要綱』とともに『原理講論』と『文鮮明先生の御言集』を土台にして、拡張され修正された倫理学理論を意味する。

²⁾ 『統一思想要綱』については、統一思想研究院、『統一思想要綱』（東京：光言社、1993）及び、統一思想研究院、『統一思想要綱』（新版）（東京：光言社、2000）を参照せよ。

³⁾ 世界キリスト教統一神霊教会、『原理講論』（東京：光言社、1995）を参照せよ。

⁴⁾ 特別な説明のない限り『文鮮明先生の御言集』とは、文鮮明先生マルス編纂委員会、『文鮮明先生マルス選集』（ソウル：成和出版社、1992-2001）を意味する。

1. 『統一思想要綱』の倫理論の極東文化的特徴

『統一思想要綱』の倫理論は極東文化の影響のもと韓国で公式化された事実を認知することが重要である。統一思想を創始された文鮮明先生と統一思想教材を編集した李相憲先生の二人とも、極東で生まれ、そこで教育を受けたため『統一思想要綱』の倫理論には独特な極東文化の特徴が、ある程度しみこんでいる。だからといって極東文化を否定的に見るということではない。極東アジアの環境から見る時『統一思想要綱』は理解しやすく役に立つということである。西洋の社会から見たとしても『統一思想要綱』の倫理論にしみこんでいる東アジアの特徴の中には西洋の文化的極端性（例を挙げると極端的個人主義）を正すのに寄与することの出来る要素もある。それにもかかわらず統一思想の倫理論が他の文化圏にも幅広く受容されることが出来て、倫理論の全分野を体系化する場合有益な資料となるようにするためには独特な極東文化の特徴を知らなければならず、統一思想の倫理論がもつ限界点を補完していかなければいけない。

そのような『統一思想要綱』倫理論の極東文化的特徴の一つは、道徳と倫理に対する定義である。キリスト教倫理学者であるバートネス（Burtneess）は、西洋社会で「道徳と倫理の違いは日常の言語の中で簡単に区別されるものではない」⁵⁾と述べている。しかし『統一思想要綱』では、道徳と倫理を次のように定義している。

統一思想では、道徳は“個人生活における人間の行為の規範”であり、倫理は“家庭を基盤とする人間行為の規範”であると定義する。道徳と倫理はそれぞれ人格と家庭を完成に導く役割を果たすものである。すなわち道徳は第一祝福完成のための規範であり、倫理は第二祝福完成のための規範である（創世記 1 : 28）

言い換えれば、道徳は内的四位基台形成のための規範であり、倫理は外的四位基台のための規範である。すなわち道徳は個性真理体としての規範であり、倫理は連体としての人間相互間における規範である。

筆者の見解では、このような倫理の定義は主に極東文化の影響を受けた結果だと考える。漢字の解字的、表意的意味は東洋人たちの講話方式に相当部分影響を及ぼした。漢字の「倫理」は、人間と人間の間で結ぶ適切な関係、または秩序がある人間関係という解字的表意的意味を持っている。韓国、日本、中国のような東洋人達が「倫理」という用語を使う時、その言葉は二千年以上の間、伝統的に人間と人間の間で結ぶ適切な関係という意味を持ち、漢字の「倫理」は、人間と人間以外の万物間との関係については全く考慮していない。「倫理」の意味に関する限り文鮮明先生も例外ではない。文鮮明先生の御言の中で、「倫理」は次のように説明されている。

人間が貴いのは人倫道徳があるからです。人倫は人と人の関係を言います。一人の人のみでは人倫という言葉は使いません。人倫という言葉は二人以上になってこそ成立します。男性と女性結婚した家庭から社会の倫理という言葉が成立するのです。倫理は人間関係の道理であり、

⁵⁾ James H. Burtneess, Consequences: Morality, Ethics, and the Future (Minneapolis, MN: Augsburg Fortress Publishers, 1999), p. 48. 道徳と倫理に関する Burtneess 自身の区別に対しては、Ibid., pp. 48-53 を参考にせよ。簡略に言って Burtneess は”道徳”と“倫理〔学〕”の関係を“信仰”と“神学”の関係に比較している。彼の見解では、倫理は道徳に関する研究を意味する。

法則です。⁷⁾

『統一思想要綱』の倫理論に影響を及ぼしている極東文化の別の特徴は、家庭の重要性と家庭的四位基台を中心とした家族関係の重要性を強調するものである。『統一思想要綱』は、倫理論を要約して次のように述べている。

神の創造理想とは、人間が家庭を通じて神の愛を実現することであり、家庭的四位基台を完成することである。したがって統一倫理論の目的は、家庭的四位基台を基盤とする愛の徳目を扱うことにある⁸⁾

『統一思想要綱』の倫理論で、「神の創造理想とは、人間が家庭を通じて神の愛を実現することであり、家庭的四位基台を完成することである」と記され、「統一倫理論の目的は、家庭的四位基台の完成である」と要約されている点は注目に値する。⁹⁾ すなわち『統一思想要綱』の倫理論は、「第二祝福」すなわち善なる家庭を完成する事にのみ重点を置いている。

2. 統一思想の倫理論のより包括的な体系化の為に

すでに言及した通り『統一思想要綱』の倫理論には、あきらかな極東文化の影響が含まれている。しかし現在、極東アジア社会だけでなく西洋社会で研究され討議されている倫理学の全分野を体系化するためには、『統一思想要綱』の倫理論の概念を修正して拡張しなければならない。筆者は『統一思想要綱』の倫理論の有効性と強調点を否定しようという考えは少しもない。ただ統一思想の倫理学の定義と範囲を拡張させることによって、西洋社会の倫理学の全ての下位分野が、統一思想の倫理論の正当な学問領域内に入るようにしようというものである。

まず西洋社会で“倫理学”という用語は人と人との関係だけでなく、人と万物の関係をも扱っている。その結果、西洋社会では“環境倫理学”に関する論争は20世紀後半以降、一般的なものとなった。反面、『統一思想要綱』の倫理論のように、倫理学の定義に対して伝統的な狭義の極東文化的概念を固守するならば、いわゆる「環境倫理学」を倫理学の学問的対象として研究する余地がない。「環境倫理学」は、人と人との間の適切な関係ではなく、人と万物との適切な関係を扱っているからである。したがって筆者は『原理講論』を基礎に『統一思想要綱』の倫理論をもっと包括的な方向にさらに体系化して、西洋の倫理学の全分野を体系化することの出来る余地を確保しなくてはならないと考える。

『統一思想要綱』の倫理論は、人と人との関係にのみ倫理学の意味を限定している為に、人と万物の関係は看過されている。それゆえ、『統一思想要綱』の倫理論は、環境問題、すなわち私たちを取り囲んでいる万物（例を挙げれば動物、植物、鉱物）に対して、私たち人間がどのような関係を結ばなくてはならず、それらをどのように愛さなくてはいけないのかに関しては一切言及してはいない。倫理学の定義自体が制限されていて人間と万物間の関係を“倫理的”な分野として把握する余地がないためである。しかし地

⁷⁾ 文鮮明、『礼節と儀式』（東京：光言社、1999）p. 64.

⁸⁾ 統一思想研究院、『統一思想要綱』〔新版〕pp. 388.

⁹⁾ 統一思想研究院、『統一思想要綱』〔旧版〕pp. 233-234.

下記部分で限界点を指摘しようと思うが、『統一思想概論』の倫理論は、倫理学が人と人との間の適切な関係に関する学問的研究であることを前提にしているので、これらの要約は間違ったものではない。しかし、西洋における倫理学分野全体を分析・体系化するためにはやや不完全である。

上天国と天上天国を実現して神の創造目的を達成するためには、第一祝福(人格完成)と第二祝福(家庭完成)だけでなく、第三祝福(万物に対する主管性完成)まで達成しなくてはならないと『原理講論』には明確に言及されている。¹⁰⁾『原理講論』は善を次のように定義している。

主体と対象が愛と美を良く授け、良く受けて合性一体化して神の第三対象となり、四位基台を造成して、神の創造目的を成就する行為とか、その行為の結果を善といい、サタンを中心として四位基台を造成して、神の創造目的に反する目的のための行為をなすこと、または、その行為の結果を悪というのである。

例を挙げれば、神を中心として心と体が、主体と対象の立場において、愛と美を良く授け良く受けて合性一体化し、個人的な四位基台を造成して、創造目的を完成した個性体となり、神の第一祝福を完成するようになるとき、その個性体、または、そのような個性体をつくるための行為を善という。そして、神を中心をしてアダムとエバが、主体と対象の立場において、愛と美を良く授け良く受けて夫婦となり、子女を生み殖やして家庭的な四位基台を造成して、創造目的を完成した家庭をつくり、神の第二祝福を完成するようになるとき、その家庭、またはそのような家庭をつくるための行為を善という。また、個性を完成した人間が、ある事物を第二の自我として、その対象の立場に立たしめ、それと合性一体化して神の第三対象をつくり、主観的な四位基台を造成して神の第三祝福を完成するようになるとき、その事物とか、または、その事物をつくるための行為を善という。¹¹⁾

このように『原理講論』では第二祝福の完成のみを強調するのではなく三大祝福の全てを完成してこそ善の完全な対象となり、神の創造目的を完成するのだと強調している。したがって筆者は第一祝福と第二祝福の観点に局限せず三大祝福全てを一つとしたうえで、すなわち『原理講論』に記されている善の全ての側面から倫理論の意味を拡張して統一思想の倫理論を再構成することを提案する。西洋学者達が伝統的に倫理学を“正しいことと善なることに関する研究”と判断してきた点に照らしてみても、これは適していることである。『統一思想要綱』の倫理論においても、やはり倫理論を紹介しながら“善を実践し善なる社会を実現するためには新しい倫理論が樹立されなくてはいけない”¹²⁾としながら、“愛の実践のための方案となるのが倫理論である”¹³⁾と述べている。それゆえ統一思想の倫理論は、他の人間を愛する方法(第二祝福の完成)を扱うだけでなく、万物を愛する方法(第三祝福)も扱うべきである。

このようにすることによって新しい統一思想の倫理論は、単に人と人との間の適切な関係だけを扱う学問から、人と人との適切な関係だけでなく、人と他の万物との関係をも扱う学問に倫理論の意味を拡張させるものだ。すなわち新しい統一思想の倫理論の分野は、“他の人間との関係”だけでなく、“万物との関係”をも説明する倫理論の分野へと拡張するであろう。しかし人間とその他の対象、すなわち人間以外の万物を含む対象との正しい関係が、倫理学の関心事となるので、私たちは依然として統一思想家達の関係性を重視する倫理概念を受容することが出来る。このようにすれば、統一思想の倫理論は三大祝福の観点と神の完全な創造目的を中心に体系化された理論となるだろう。したがって筆者は上記で引用された『統一思想要綱』に出て来る倫理と道德の定義に関する部分を下記のように修正することを提案する。

¹⁰⁾ 世界キリスト教統一神霊教会、『原理講論』、pp. 44-49 および 53-54 を参考にせよ。

¹¹⁾ Ibid., pp. 53-54.

¹²⁾ 統一思想研究院、『統一思想要綱』 pp. 389.

¹³⁾ Ibid., p. 390.

統一思想において道徳とは“個人が守るべき行為の規範”であり、人間に関連する倫理は“家庭において家庭の構成員が守るべき行為の規範”として定義される。そして万物と関連する倫理は、万物を主管する生活に関する人間行為の規範であると定義される。道徳は個人が人格を完成するようにする案内者の役割をするもので、人間と関連する倫理の役割は、個人が家庭生活を完璧にする為の案内者の役割をするものである。万物と関連する倫理の役割は、生活の中で万物に対する主管性を完成するのに必要な案内者の役割をするものである。すなわち、道徳は第一祝福完成の為の規範、人間に関連する倫理は第二祝福完成の為の規範、そして万物と関連する倫理は第三祝福完成の為の規範である。(創 1 : 28)

したがって道徳は内的な「個人的な四位基台」、人間と関連する倫理は外的な「家庭的な四位基台」、万物と関連する倫理は「主管的な四位基台」の完成の為の規範である。もう少し正確にいうと、道徳は「個性真理体」としての人間の為の規範であり、倫理は他の人間と万物との関係を有する「連体」としての人間の為の規範である。¹⁴⁾

同じく、上で言及したように倫理学の意味をあらかじめ拡張したため、“神の創造理想”と上で言及した“統一倫理論の目的”に関する『統一思想要綱』の記述を次のように修正する事を提案する。

要約すると、神の創造理想は各々の個性真理体としての人間が、神の愛を受け入れて個人的な四位基台を完成することであり、男性と女性が家庭を通して神の愛を体じゅつし、家庭的四位基台を完成する事であり、人間がすべての万物を主管する生活を通し神の愛を実践し、主管的な四位基台を完成する事である。統一倫理論の目的は個人的四位基台、家庭的四位基台、主管的な四位基台の完成を成就するところにある。¹⁵⁾

また、人々と私達自身がなした過去と現在の行為に対して、善と悪の判断を下すのに助けを与えてくれるもう少し包括的な倫理論が必要である。『統一思想要綱』の倫理論は、基本的に本然の世界、すなわち理想的な世界において行動する方法に関する問題を扱っている。例えば『統一思想要綱』の倫理論は、過去と現在において戦争に参加すべきなのか否か、そしてどのような状況において戦争に参加すべきかに対しては回答を与えることは出来ない。『統一思想要綱』の倫理論は、個人が備えるべき美德として『正直』を唱えているが、それが戦争で敵を騙しても良いものなのか、あるいは戦争中でさえも絶対的平和主

¹⁴⁾ これは Unification Thought Institute, Essentials of Unification Thought (Tokyo: UTI, 1992), p. 206 に出てくる部分を筆者が修正したものである。統一思想研究院の院長として『統一思想要綱』を編集し体系化した李相軒院長は、筆者が三大祝福の観点から倫理論の定義を拡張する事によって、統一思想の倫理論が“環境倫理”と西洋社会の倫理学分野で扱われている異なった倫理的論点を討議できるようにすることに対して同意して下さった。倫理論に関する筆者と李相軒院長の会話がなされたのは、ソウルにあった統一思想研究院が、1996年の秋学期に天安市の鮮文大学校に移って来た直後で、筆者の研究室においてなされた。

三大祝福を土台に、統一思想の教育論は3種類の教育形態を提示している。第一祝福を完成する為の“心情教育”、第二祝福を完成する為の“規範教育”、そして第三祝福を完成する為の“主管教育”がそれぞれある。よって、統一思想の教育論と修正された統一思想の倫理論を結びつけて言うならば、“道徳”は心情教育、“人間と関連する倫理”は規範教育、“万物と関連する倫理”は主管教育(知識教育、技術教育、体育教育)と関連性がある事を知る事が出来る。

¹⁵⁾ これは統一思想研究院、『統一思想要綱』、p. 392 と Unification Thought Institute, Essential of Unification Thought p. 205 に出てくる部分に対して筆者が修正したものである。

義者として正直であるべきなのかを教えてくれている。しかし『原理講論』と『文鮮明先生の御言集』は、このような倫理的な疑問に対して明白な回答を提示している。¹⁶⁾ したがって『原理講論』と『文鮮明先生の御言集』を考慮した後、統一思想の倫理論がもう少し包括的な性格を帯びるように修正することによって、その意味を明白にするべきである。そのような倫理論は、未来の理想世界の行動に対する善悪の基準になるだけでなく、墮落世界と復帰過程にある世界において、人々と私達自身の過去と現在の行動に対しても、善悪を判断するのに助けを与える事が出来る。特に、過去と現在、そして未来の人間の行動における正邪と善悪を論じている世界中の倫理学の全分野を体系化しようとするならば、統一思想の倫理論の内容をより拡張すべきである。

これらは『統一思想要綱』の倫理論と、修正された統一思想の倫理論との差が出る主なる部分である。後者はまだ完全に提示されていないが、『統一思想要綱』、『原理講論』、『文鮮明先生の御言集』から構成されるものとして見なす事が出来る。修正された統一思想の倫理論は、『統一思想要綱』に出てくる重要な主張中、そのどんなものも否認しない。修正された統一思想の倫理論は、基本的に“人間と万物の関係に関連する倫理学”を、現在の『統一思想要綱』に付け加え、未来の理想世界のみならず、過去と現在にも適用できる包括的な倫理論として拡張するものである。この論文の次の部分からは、修正された統一思想の倫理論の観点に立って、倫理学分野の体系化を試みることにする。

II. 倫理学の分類

このセクションでは、拡張された統一思想の倫理論的観点から、倫理学を分類し論議する。米国の倫理学教授サハキアン(Sahakian)は、西洋における既存の倫理学を定義して、「倫理的用語、理論、信条などの論理的分析をなすことと、正しいことと善なることを研究することである」¹⁷⁾ と言ったが、筆者はその見解に同意する。倫理学を分類する時、その内容の性格、善悪決定の方法論、主題分野、研究者達の類型を基準として行うことにする。既に上記で統一思想の倫理学の領域を拡大したので、倫理学分野の分類に関しては、統一思想と既存の倫理学者たちの間には深刻な意見の相違はない。それゆえ、このセクションでは簡単に分類項目だけを羅列する程度にする。

1 内容の性格による倫理学の分類：メタ倫理学(Metaethics)と規範倫理学(Normative Ethics)

倫理学を、その内容の性格によって分類することが出来る。倫理学界では、倫理学をその内容の性格によって、普通、「メタ倫理学」と「規範倫理学」の2種類に分類している。¹⁸⁾

メタ倫理学：メタ倫理学は倫理的用語の意味と性格、道徳的判断の適合性などを論理的、分析的に研究することをいう。メタ倫理学は、哲学的及び分析的倫理学ともいうことが出来る。Sahakianによると、メタ倫理学という用語は、1949年 A. J. Ayer が書いた“On the Analysis of

¹⁶⁾ 世界基督教統一神霊協会、『原理講論』, pp. 136-138 及び 507-508 を参照せよ。

¹⁷⁾ William S. Sahakian, Ethics: An Introduction to Theories and Problems (New York: Barnes & Noble Book, 1974), p. 3.

¹⁸⁾ メタ倫理学と規範倫理学の分類に関しては Sahakian, Ethics, pp. 3-5; Roger N. Hancook, Twentieth Century Ethics (New York: Columbia University Press, 1974), pp. 3-10 を参考とせよ。

¹⁹⁾ Sahakian, Ethics, p. 202. または Ibid., p. 5: A. J. Ayer, “On the Analysis of Moral Judgements” Horizon 20 (1949) を参考とせよ。

²⁰⁾ A. J. Ayer, Language, Truth, and Logic (London: Victor Gollancz, 1936).

²¹⁾ C. L. Stevenson, Ethics and Language (New Haven: Yale University Press, 1944).

²²⁾ Hancook, Twentieth Century Ethics, p. 5 を参考とせよ。

Moral Judgments”という文献で初めて登場した。¹⁹⁾ しかし R. N. Hancock は A. J. Ayer の Language, Truth, and Logic²⁰⁾だけでなく C. L. Stevenson の Ethics and Language²¹⁾も、規範倫理学とメタ倫理学の区分に影響を及ぼした本としてみなしている。²²⁾ メタ倫理学は、倫理学に対する分析と方法論に焦点を合わせている。規範倫理学とは違い、具体的な人間の行動の是非に関する規定は提示していない。

規範倫理学： 道徳的な正邪・善悪や、または、『すべきこと (ought to)』を、人間の行為と関連して規定している倫理学を意味する。規範倫理学は、道徳的規範を樹立し人間の行動の指針としようとする。したがって規範倫理学では、「すべきこと」と「すべきでない」という禁止事項を直接、又は間接的に内包している。言い換えると、規範倫理学は、人間の特定の行為を善なるものとして明確に規定している。規範倫理学が、より“神学的”なものであると見る事が出来るのだが、その理由は、人間の行動に関して道徳的価値判断をしないメタ倫理学に比べて、規範倫理学は明確な道徳的価値判断を内包している為である。

したがってメタ倫理学は、純粋に哲学的なものとして、これは厳密な意味から“哲学的倫理学”といえるであろう。しかし中世の哲学的倫理学には、規範倫理学も含まれていた。一方、“神学的倫理学”と呼んでいる倫理学には規範倫理学も含まれている。現在の『統一思想要綱』の倫理論は、相当部分がメタ倫理学に属している。規範倫理学に属する部分は極めて少ない。しかし筆者は、拡張された統一思想の倫理論は、メタ倫理学と規範倫理学とから構成されていると見る。『原理講論』及び『文先生のみ言』の中には、規範倫理学に属する部分が非常に多いからである。個人的には、拡張された統一思想の倫理論は、『統一思想要綱』の内容はもちろん、『原理講論』と『文鮮明先生のみ言』から構成されなければならないと見ている。

2. 善悪決定の方法論による倫理学の分類

善悪決定に関する各々異なった方法論に起因して、倫理学分野は多くの学派、又は多くのタイプの倫理論に分類する事が出来る。このセクションでは多くの学派の類型を列挙するだけで終えようとする。続くセクションⅢで、善悪決定の方法論の差異に起因する多くの異なる倫理論を統一思想の観点から照明しそれらの有効性を評価するからである。多くのタイプの倫理論を、列挙し体系化する方法はいくつかあるが、分類に関しては深刻な意見の違いはない。²³⁾ 筆者は多くのタイプの倫理論を、1) 目的論的倫理論、2) 義務論的倫理論、3) 結果論的倫理論、4) 状況的倫理論、5) 人格倫理論(徳目倫理論)、6) 道徳率廃棄論的な倫理論として分類しようと思う。これらの倫理論の分類に関しては深刻な意見の違いはないが、その有効性の評価に関しては今まで熱烈な議論が展開されてきたように、重大な見解の相違が

²³⁾ Norman L. Geisler, Christian Ethics (Grand Rapids, Michigan: Baker Book House, 1989), の基督教倫理学は6種類の類型で分類されてる。1) 道徳率廃棄論、2) 状況倫理、3) 一般主義 (generalism)、4) 無条件的絶対主義 (unqualified absolutism)、5) 葛藤的な絶対主義 (conflicting absolutism)、6) 差等的な絶対主義 (graded absolutism)である。Joseph Fletcher は全ての倫理論を、律法主義、状況倫理、道徳率廃棄論的な倫理の、3種類の類型で分類した。Joseph Fletcher, Situation Ethics (Philadelphia: Westminster, 1966), pp. 17-39を参照せよ。James H. Burtness は最近、彼の著書である Consequences で倫理学を、義務論的倫理論、状況倫理論、目的論的倫理論、人格倫理論など、4種類に分類したが、結果論的倫理論を目的論的倫理論と区別し論議する事にした。本論文では、このような学者達の分類法を折衷して使用する。

ある。それゆえ、善悪決定の方法論の差異に起因する各種の倫理論の有効性に対する評価が、この論文の中心的内容となっている。

3. 主題分野による倫理学の分類

主題分野別に倫理学を分類する事が出来る。倫理学の中で扱う主題分野は少しずつ増加している。長い間倫理学は哲学の一分野として扱われながら“道徳哲学”と呼ばれたりもした。もちろん“哲学的倫理学”と呼ばれもした。しかし20世紀に入り、基督教神学が哲学分野から確実に分離され、“神学的倫理学”又は“基督教倫理学”として登場した。

哲学的倫理学と神学的倫理学（基督教倫理学）とは別に、“社会倫理学”という用語が20世紀中盤に下位分野として成立され、人気を受けるようになった。全ての道徳的問題と社会問題を、社会倫理学という名の元で扱い論議する場合が多かった。しかし社会倫理学は多くの下位分野に分化した。企業倫理学、医療倫理学、性倫理学、人種倫理学、環境倫理学、法曹倫理学、生命倫理学などの主要下位分野を列举する事が出来る。このような分野は“専門職業倫理学”とも呼ばれながら、大きく見ると社会倫理学に属している。専門職業倫理学は、より多くの下位分野に分けて考える事が出来るが、特定の専門職業とその下位分野の増大によって専門職業倫理学もそれだけ多くなることが出来るからである。専門職業倫理学は、特定の専門職業グループの規範と関連のある場合が多い。各々の倫理学分野は、前のセクションで紹介した善悪決定の異なる方法論に起因した多様な倫理論に基づく多様な研究を量産した。

4. 研究者達の類型による倫理学の分類

研究者達の類型を基準として倫理学を分類する事も出来る。研究者達の類型と主題分野が密接に関連する 경우가一般的であるが、別個である場合もある。したがって、基督教信仰を持つ学者達が倫理学を研究するときは、一般的に基督教倫理学になる。基督教倫理学は、さらにルター教派倫理学、メソジスト教派倫理学、バプテスト教派倫理学、ローマ・カトリック教会倫理学、ギリシア正教会倫理学などと細分化することが出来る。これと同じように、ユダヤ教学者が倫理学を研究するならユダヤ教倫理学、仏教学者が倫理学を研究するなら仏教倫理学、儒教学者が倫理学を研究するなら儒教倫理学、回教学者が倫理を研究するなら回教倫理学、ヒンズー教学者が倫理学を研究するならヒンズー教倫理学などになるのが一般的である。これらはまた、宗教倫理学の次元から見る事も出来る。宗教倫理学を地球上に存在する多様な宗教の伝統によって細分することが出来る。

宗教倫理学以外にも、研究者達の類型によって倫理学を細分する事が出来る。マルクス主義者が研究した倫理学は、マルクス主義倫理学と呼ぶ事が出来る。実存主義者が研究した倫理学は、実存主義倫理学と呼ばれる。実用主義者が研究した倫理学は、実用主義倫理学と呼ばれる。フェミニスト学者が研究した倫理学は、フェミニスト倫理学と呼ばれる。解放神学者が研究した倫理学は、解放倫理学とも呼ばれる。ナレーティブ倫理学者の研究はナレーティブ倫理学とも呼ばれる。このように倫理学は、主題分野が何であれ研究者たちの類型によって、上記のように呼ばれる傾向が、それは研究者達の類型によって視覚と分析方法論が、それぞれ異なり独特である為である。これらの独特な各々の分析方法論は、善悪決定の方法論により分類した倫理学的方法論の一つの類型に属する。²⁴⁾

III. 統一思想の観点から見た倫理論の評価

²⁴⁾ 本論文セクションII、2 及びセクションIIIを参考とせよ。

このセクションでは、統一思想の観点から既存の倫理論を論議し評価する。このセクションで論議する倫理論は、1) 目的論的倫理論、2) 義務論的倫理論、3) 結果論的倫理論、4) 状況倫理論、5) 人格倫理論（徳目倫理論）、6) 道德率廃棄論的な倫理論などである。各理論の間にある程度重複する部分があるが、この程度であれば倫理学の全体分野を網羅すると思われる。²⁵⁾ 各々の倫理論に対する論議を楽しく、そして分かりやすくする為に、“嘘を言う行為”を例に挙げて説明する。

1. 統一思想の観点から見た目的論的倫理論

目的論的倫理論は、道德的判断をする時、一番重要に考慮すべき事項を、究極的な目的や目標と見る倫理論である。目的論的倫理論(teleological ethics)という用語は、“目的”という意味をもつギリシヤ語“Telos”から由来した。目的論的倫理論の立場では次のような質問が重要である：“究極的な目的は何か？”“究極的な目標は何か？”目的論的倫理論では、人間の行為が究極的善や目的達成に貢献するのなら、その行為は善なるものとして判断される。²⁶⁾

アリストテレスの倫理論は、目的論的倫理論と呼ばれる場合が多いが、それは人間と万物が指向する究極的善があるということを指摘した為である。彼の倫理論によると、万物はそれぞれ指向する究極的な目的をもっており、また人間が志向する究極的目的は幸福(eudaimonia)である。アリストテレスによると、靈魂が徳目と一致した活動をする事によって幸福(eudaimonia)を成就する事が出来るのであるが、人間の人生はそのような可能性を実現して行く過程である。したがってアリストテレスは、そのような幸福を達成する事を善と見なし、人間はそのような究極的目的を成就する為に努力すべきであると主張した。²⁷⁾ ベンサム(Jeremy Bentham)の功利主義は、目的論的倫理論の良い例と思われる。社会主義／共産主義社会の建設を促進する行動は善なるものであり正義感に満ちたものであると考えるマルクス・レーニン主義の倫理論もやはり目的論的倫理論の一例に属する。嘘をつく行為を例として考える時、目的論的倫理論の立場からは、嘘をつく行為が究極的な目的を達成するのに役に立つのであれば、それは善なるものとして考える事も出来るのである。

統一思想の倫理論も一種の目的論的倫理論だといえる。なぜなら『原理講論』の定義によると、善は上記のセクションIで論議したように、神の創造目的を基準として判断されるからである。²⁸⁾ 『統一思想要綱』の倫理論もやはり道德的判断をする時は、目的の重要性を重ねて強調している。「人間は、家庭の四位基台を通して神の愛を実現するという明確な目的をもっており、その目的に一致する行為が善になるのである」²⁹⁾という内容が言及されている。さらに、「創造目的とは、真の愛(神の愛)を実現する

²⁵⁾ 目的論的倫理、及び結果論的倫理は互いに重複する面がある。よって一部の倫理学者達は、二つの理論を分離して扱わない傾向もある。

²⁶⁾ W. K. Frankena は目的論的倫理論を‘倫理的利己主義 (ethical egoism)’と‘倫理的普遍主義 (ethical universalism, 功利主義ともいう)’の2つの有形で分類した。William K. Frankena, Ethics (Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall, 1973), pp. 15-16 を参照せよ。

²⁷⁾ Aristotle, The Nicomachean Ethics, David Ross が翻訳し紹介文を付けた (Oxford: Oxford University Press, 1980); Martin Oswald, An Introduction to The Nicomachean Ethics by Aristotle, Martin Oswald trans. (Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1962), pp. xi-xxvi. アリストテレスの倫理論はさらに人格倫理(徳目倫理)とも関連がある。

²⁸⁾ 『原理講論』に出てくる善の定義に対しては、世界基督教統一神霊協会、『原理講論』、p. 53 を参照せよ。本論文のセクションIに該当語句が引用されている。

²⁹⁾ Unification Thought Institute, Essentials of Unification Thought, p. 218. 統一思想研究院、『統一思想要綱』、p. 414 を参照せよ。

事である。したがって創造目的に一致する行為が善になる」ことが明記されている。³⁰⁾

『原理講論』では、過去の歴史の中の行為の善悪を解釈する内容から、目的論的倫理論の様相が多分に現れる。『原理講論』には、“目的性から見た善と悪”という題目で次のように記述してある。

本来の欲望は創造本性であるがゆえに、この性稟が神のみ意を目的として結果を結ぶならば、善となるのである。しかし、これとは反対に、サタンの目的を中心としてその結果を結べば悪となるのである。この悪の世界も、イエスを中心とし、その目的の方向だけを変えるならば、善なるものとして復帰され、地上天国が建設されるという事は（前編第三章第二節（二）参照）、このような原理を見て明らかにされるのである。したがって、復帰摂理は、サタンの目的を指向しているこの墮落世界を、神の創造目的を成就する地上天国へと、その方向性を変えていく摂理であるとも、見ることができるのである。

復帰摂理の性格がそうであるから、この摂理の過程において取り扱われる善の基準は、絶対的なものではなく、あくまでも相対的なものである。なぜかといえば、ある特定の時代の上に立って考えてみると、その時代の主権者の理念の指向する目的に順応すれば善となり、その目的に反対すれば悪となるのであるが、いったん、その時代と主権者が変わり、その理念が変わるようになれば、同時にその目的も変わるので、したがって、善と悪の基準も変わるようになるのである。そればかりでなく、宗教や思想においても、その枠内にある人々にとっては、その教理とその思想が指向する目的に順応することが善であり、それに反対することは悪となる。しかし、いったんその教理や思想が変わるか、あるいは他の宗教に改宗するか、または他の思想に転向するようになれば、それに従って、目的も異なってくるので、善悪の基準もおのずから変わるようになるのである。人間社会において、常に闘争と革命が起こるその主な原因は、このように、人間の指向する目的が異なるに従って、善悪の基準が、常に異なってくるところにあるといえよう。¹

目的論的倫理論の問題点は、過去の歴史で、学者達の間で絶対的な善に対する合意がなかったという事実である。改めて言うならば、多数の目的論的倫理論が間違った目的を究極的な善と感じていたという意味にもなる。マルクス主義の倫理論が、目的を間違って設定した目的論的倫理論の良い例の一つだ。しかし、統一思想は、基本的に善と悪を決定する時、目的論的方法論の有効性を認定している。統一思想によれば、神の創造目的の完成を基準に究極的な目的と、善を判断する。万人が、神の創造目的を理解して、それを完成しようと努力する時、善と悪の基準は世界的に一つになり、一致するようになるだろうと見通している。² セクション1で、論議したように、拡張した統一思想の倫理論は、三大祝福の完成と地上天国、及び天上天国の実現を神の創造目的として提示する。

2. 統一思想の観点から見た義務論的倫理論

義務論的倫理論 (deontological ethics) は、道徳的判断をする時、人の義務、または普遍的な道徳的責任を履行することが、考慮すべき一番重要なことであると主張する倫理論である。義務論的倫理論で

³⁰⁾ Ibid.

¹ 世界基督教統一神霊協会、『原理講論』、p. 119.

² Ibid.

は、次のような質問をする：“正しいことは何か？”“私達の義務が何なのか？”“従うべき普遍的な道徳的要求は何なのか？”“従うべき規則は何なのか？”義務論的倫理論では、人が従わなければならない普遍的な義務と道徳があつて、時間や場所、そして、どんな場合であるかを問わずして、これを守らないといけないと主張する。義務論的倫理論では、目的や結果によって正しいとか、正しくないとかが変わるとは見えていない。よつて、正しいとか正しくないとかを判断する時、行為の目的や、結果を問いただしたりはしない。義務論的倫理論の立場で見れば、個人の義務、または普遍的な責任を成すための行為は、常に正しく、善なるものとして見なす。義務論的倫理論では、すべての人間が、昔も今も未来にも守らなければならない共通の道徳、すなわち、普遍的な道徳的責任があると認識している。義務論的倫理論が、正直(嘘をつかないこと)をそのような義務、または、普遍的な道徳的責任としているならば、その目的や、結果を問わず、どのような状況であつたとしても、嘘をついてはいけない。正直が正しいものだからだ。それゆゑ、義務論的倫理論と目的論的倫理論は対立すると見なすことができる。義務論的倫理論は、目的論的倫理論が主張する点を拒否し、目的論的倫理論は、義務論的倫理論が主張する点を拒否するからである。

多くの学者達は、カントの倫理論が義務論的倫理論の良い例だと指摘する。カントは“結果がいかなるものにせよ、‘何々すべし’という定言命法に従つた行為であれば善である”³とした。カントは、行為の結果には関心を傾けず、行為の動機だけを問いただす。トマス・アクィナスの倫理論もまた義務論的倫理論と見なす事ができるが、彼は、正しいことをするためには、どんな場合であつたとしても守らなければならない自然法が存在することを強調したためである。⁴時間と空間を超越して万人が守らなければならない自然法と普遍的道徳規範があることを主張する倫理の見解は義務論的倫理論に属する。

キリスト教徒の中では、絶対的平和主義を実践する少数のグループがある。そのような平和主義者グループの中では、アーミッシュ派(Amish)と、フッター派(Hutterites)有名であるが、彼らはヨーロッパの急進的宗教改革運動に根を置いている。このような絶対的平和主義者たちは、義務論的倫理論を支持して、これを徹底して実践している。彼らは「怨讐をも愛して、人を殺すな」という神とイエスの命令に服従することは、キリスト教徒の絶対的な義務だと感じている。従つて、かれらは武器を持つとか、軍人になり戦争に参加することを必死で拒否する。彼らは敵軍を殺すことに反対するだけでなく、暴力的な犯罪者達を殺すことも反対するために、鉄砲を持たないといけない軍人や警察官になることはできない。うそをつく行為に関して考えてみるならば、アーミッシュ派とフッター派は、戦争状況を含めて、どんな場合でもうそをつくことはできない。彼らはキリスト教徒の義務を守り、苦痛を受けたとしても、その苦痛を喜んで受け止める。彼らは既にこの地上に天国が実現したつもりで行動し、現実を理解してないとする批判を受けたりもする。筆者が見る範囲では、絶対的平和主義者でないとしても、多くのキリスト教福音主義派の倫理学者達はキリスト教倫理論が目的論的倫理論を拒否して、義務論的倫理論を支持していると理解しているようである。⁵

前述したように、統一思想の倫理論は目的論的倫理論と、結果論的倫理論を幅広く支持する。『統一思想要綱』では、カントの義務論的倫理論を批判しながら「ある行為が善かどうかを決定しなければならない場合、その行為の結果を確認しなければならないからである」⁶と言及している。統一思想の倫理論はカン

³ 統一思想研究院、「統一思想要綱」、p. 401.

⁴ しかし、徳目倫理論を支持する学者達は、最近アクィナスの倫理論を義務的倫理論に含ませることに反対して、むしろ徳目倫理論に含ませなければならないと主張する。次に出てくる人格倫理論を参考にせよ。

⁵ 例えば、福音主義派の倫理学者である Geisler は、キリスト教倫理論は義務論的だと主張する。Geisler, Christian Ethics, pp. 24 - 25 を参考にせよ。

⁶ 統一思想研究院、『統一思想要綱』、p. 401.

トが、目的または目標を追求する人間の姿を蔑視することを批判している。『統一思想要綱』の倫理論では、次のように言及している。

このようなカントのいろいろな問題点は、すべてカントが神の創造目的が分からなかったことに起因している。彼は、目的といえ、無条件に自愛的、利己的なものであると考えたのである。統一思想から見れば、創造目的には全体目的と個体目的があるのであって、人間は本来、全体目的を先に立てながら個体目的を追求するようになっている。ところが彼は、目的というとき、もっぱら個体目的だけを考えたのである。その結果、彼はすべての目的を否定してしまい、その道徳律は基準が曖昧なものとなってしまったのである。⁷

しかし、筆者は地上に理想世界が創建されたならば、目的論的倫理論と義務論的倫理論の葛藤を自然に解決できると見る。『原理講論』には義務論的倫理論の要素もまた、内在している。本心を説明する部分で人間が本心に従えば、自然に善の行動をするようになると記述している。『原理講論』では良心と本心を次のように説明する。

人間の心は、常に自分が善であると考えるものを指向する。このような心を良心という。しかし、墮落人間は善の絶対的な基準を知らず、良心の絶対的な基準をも立てることができないので、善の基準を異にするに従って、良心の基準も異なるものとなり、良心を主張する人たちの間にも、しばしば闘争が起こるようになる。善を指向する心の性相的な部分を本心といい、その形状的な部分を良心という。

それゆえに、人間がその無知によって、創造本然のものと基準を異にする善を立てるようになるときにも、良心はその善を指向するが、本心はこれに反発して、良心をその本心が指向する方へと引き戻す作用をする。⁸

全ての人が神の御旨を理解する理想世界では、各自が義務を追及することと、人生の目的を追求することとの間に、相衝突することがあるわけがない。人間の本心は、神の創造目的と個人の義務の両面を全て理解することになっている。すなわち、本然の世界では、本心の命令に従って天法に服従すれば、自然に神の創造目的を成就するようになっていると言っても間違いではないであろう。

3. 統一思想の観点から見た結果論的倫理論

結果論的倫理論(consequential ethics)は、道徳的判断をするとき、考慮しないといけない一番重要なことは、行為の実際結果、もしくは、予想される結果であると主張する倫理論である。⁹ 目的論的倫理論と大変に類似した結果論的倫理論は、義務論的倫理論と対立する傾向にある。よって、一部学者達は目的論的倫理論と、結果論的倫理論の間に、明確な違いを置きはしない。¹⁰ 結果論的倫理論は、目的論的倫

⁷ Ibid., p. 402.

⁸ 世界基督教統一神霊協会、『原理講論』、pp. 88 - 89.

⁹ 結果論的倫理論に関する論議に対しては、Burtneiss, Consequences, pp. 98 - 141 を参考に。彼はキリスト教倫理学者として結果論的倫理論を協力に支持している。

¹⁰ 例として、W. Frankena は、目的論的倫理論と、結果論的倫理論を別々に説明はしない。William Frankena, Ethics (Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall, 1973) を参照。Burtneiss もやはり、結

理論の一種として見ることができる。結果論的倫理論は、状況倫理とも類似する点がある。それは、二つの倫理論が共に、誰もが従うべき普遍的な道徳的規範が存在することを否定するためである。結果論的倫理論は過去の行為に対して、正しかったか正しくなかったかを判断するのによく適用される。行為の結果が善なるものと予想されたり、善なるものとして帰結する場合、その行為は善であると判断される。よって、結果論的倫理論の立場では、うそをつく行為を初めから悪いことだと規定することはできない。うそが良い結果をもたらしたならば、それもまた善なる行為として判断される。

結果論的倫理論の良い例は、ベンサム功利主義である。『統一思想要綱』が、彼の倫理論を要約しているように、ベンサムは「快楽と苦痛を量的に計算して、最も多くの快楽をもたらす行為が善であるとみて、『最大多数の最大幸福』をその原理とした。」¹¹ カントの義務論的倫理を批判しながら、『統一思想要綱』の倫理論では「特定の行為が善なることなのか、悪なることなのかの良し悪しを判断しようとするなら、その行為の結果を確認しないとイケない」¹² と指摘している。従って、統一思想の倫理論は基本的に方法論として結果論的倫理論を支持していると見ることができる。¹³

しかし、結果論的倫理論の問題点は目的論的倫理論と同じように、学者たちの間で善なる結果に対する一致した定義が無いという点である。従って結果論的倫理論は部分的に善なる結果のみを追求するものとして終わってしまうことが多い。例えば、ベンサムは人間に快楽と苦痛をもたらすものとして4つに分けることができる源泉、即ち物理的、政治的、道徳的、及び宗教的源泉があると言ったが¹⁴、その中でも一番根本的なものは物理的な源泉だと言った。それは、物理的快楽と苦痛は客観的に計算することが出来るからである¹⁵。従って、彼は出来るだけ多くの人々が均等に物質的な富を得ることが一番望ましいことであると考えた。ベンサムが主張した功利主義倫理論の問題点は、幸福は物質的快楽にあるとした点である。しかし、統一思想によると、物質的快楽によっては人間の真なる幸福は実現されない¹⁶。

ジェームス (William James) の実用主義的 (プラグマティズム的) 倫理論もまた結果論的倫理論の一種と見る事が出来る¹⁷。ジェームスは、有効なもの (What Works) が真実であると言った。換言すれば、ジェームスは有用性を生み出す結果に重要性を付与したのである。しかし、『統一思想要綱』の倫理論では、ジェームスの倫理的見解を次のように批判している。

創造目的とは、真なる愛 (神の愛) を実現するという事である。従って、創造目的に一致する行為が善となるのであって、生活に役立つ行為が必ずしも善ではない。勿論、生活に役立つ行為が神の創造目的に適っていれば善となる。ジェームズは生活に役立つということを、真理と善の基準にし

果論的倫理論は、目的論的な方法論であり、結果論的倫理論は目的論的倫理論と同じ意味で使用される時もあると述べている。Burt n ess, Consequences, p. 98 を参照。しかし、彼は Consequences という著書で、この二つを区分して、結果論的倫理論と目的論的倫理論の両者を論議した。この論文は、Burt n ess の知恵を相続して作成された。

¹¹ 統一思想研究院、『統一思想要綱』、p. 403.

¹² Ibid., pp. 400 - 401

¹³ このことは統一思想が目的論的倫理論を支持すると筆者が前で明らかにした内容と矛盾することはない。結果論的倫理論は目的論的方法論を使うためである。

¹⁴ Jeremy Bentham, The Principle of Morals and Legislation (New York : Prometheus, 1988), p. 24 を参考にせよ。

¹⁵ 統一思想研究院、『統一思想要綱』、p. 407.

¹⁶ Ibid., p. 408.

¹⁷ たとえば、Robin Gill は多様な類型の功利主義的倫理論と実用主義的倫理論が、結果論的倫理論に属する議論を形成していると述べている。Robin Gill, A Textbook of Christian Ethics, 2nd ed. (Edinburgh : T&T Clark, 1995), p. 7 を参考にせよ。

たが、生活は何のためにあるのか、人間は何のために生きるのかと、いうことを追究しなければならなかったのである¹⁸。

言い換えれば、ベンサム功利主義と同じように、ジェームスの実用主義は真に善なる結果を成す要素が何であるかを完全に理解できていない。神の創造目的を理解できなかった為である。

現在、結果論的倫理論を支持する学者たちが数多いように見える。ローマカトリック教会所属で、徳目倫理を支持するネルソン(Daniel M. Nelson)は1992年に、「自然法的倫理論と結果論的倫理論が、ローマカトリック倫理学者達の間では、最近主流的選択となっている」¹⁹と言及している。ルター教派の倫理学者であるJames H. Burtnessもまた Consequences という著書の中で、自分は結果論的倫理論を支持すると明らかにしている²⁰。

4. 統一思想の観点から見た状況倫理論

状況倫理論(Situation Ethics)は行為が起こる各状況の特性を考慮して、善悪を判断する倫理論である。状況倫理論は全ての状況に共通に適用することができる普遍的な道徳的義務や責任があるという点を否定する。状況倫理論によると、特定行為の善悪は各々の状況によって変わってくる。全ての行為に適用して道徳的判断を下すことができる普遍的な道徳的規範はない²¹。状況倫理論では、各々の行為はその状況に従って、異なると判断されるため、同一人物が同一の行動をしたとしても正確に価値判断的に全く同一の行為は無いことを強調する。嘘をつく行為を例に挙げてみると、状況倫理論は嘘をつくこと自体を善や悪に区分しない。状況倫理論は、戦争のような特殊な状況では嘘も正しいものになると主張する。

キリスト教倫理学者であるフレッチャー(Joseph Fletcher)は1966年に『状況倫理』という題目で本を出版して、状況倫理論を有名にした²²。義務論的倫理論や律法主義的倫理論に対して、大変批判的な状況倫理論は、“結果によって手段が正当化される”という面において目的論的倫理論や結果論的倫理論と似ている面がある²³。フレッチャーだけでなく、現代の多くの学者達が状況倫理を支持している。実存主義哲学者達は各状況において勇氣ある主観的決断を追求する傾向があるため、Burtnessは哲学的実存主義者達は全て倫理的状況論者達²⁴であると述べている。従って、彼にとって“実存主義者の倫理論”は、状況倫理論と密接に関連している用語²⁵である。一部の学者達は状況倫理論を指して“脈絡主義(Contextualism)”、“偶因論主義(Occasionalism)”、“境遇主義(Circumstantialism)”とも言う²⁶。フレッチャーを含む他の学者達

¹⁸ 統一思想研究院、『統一思想要綱』，p. 414.

¹⁹ Daniel Mark Nelson, The Priority of Prudence : Virtue and Natural Law in Thomas Aquinas and the Implications for Modern Ethics (University Park : Pennsylvania State University Press, 1991) , p. 134.

²⁰ Burtness, Consequences を参照せよ。

²¹ しかし Joseph Fletcher は世俗の状況倫理論者とは違い、次のように論じている。

キリスト教状況倫理論には、ただ一つの規範や原理、もしくは法(どのように呼んだとしても)があって、状況に拘束されることなくいつも善であり、正しい事を要求する。それは正に‘愛’即ち、神と隣人を愛するアガペー的愛である。それ以外の異なる全てのこと、即ち、全ての法と規範と原理と理想は、付随的な自由なものであり、どのような状況でも愛を実現するにおいて助けになるときに限り有効である。

Joseph Fletcher, Situation Ethics, p. 30 を参照せよ。

²² Fletcher, Situation Ethics を参考にせよ。状況倫理に対する論議に対しては Harvey Cox, ed., The Situation Ethics Debate , p. 30 を参考にせよ。

²³ Fletcher, Situation Ethics, p. 120.

²⁴ Burtness, Consequences , p. 74.

²⁵ Ibid..

²⁶ 脈絡主義に関しては Paul Lehmann, Ethics in a Christian Context (London : SCM, 1963) を参考に

は“行為一功利主義(Act-utilitarianism)”と言う用語を使用して、「幸福」に代わって「愛」を有用性を判断する基準として提示することによって状況倫理論を説明している²⁷。

『統一思想要綱』には状況倫理論を評価する部分が無い²⁸。状況倫理論に関しては、まったく言及していない。従って統一思想の倫理論が状況倫理論をどのように評価するのか明確に知ることはできない。しかし、『統一思想要綱』及び『原理講論』と「文鮮明先生の御言」を基準にして統一思想の立場を整理してみると、状況倫理論を評価することができる。状況倫理論と統一思想の倫理論の類似点を見てみると、二つの思想は両方とも、過去の人類歴史においてどのような状況においても絶対的に守らなければならない普遍的な道徳的義務・規範があることを否定する。従って、モーセがエジプト人の工事監督を殺した事件と、イエスの母であるマリアが祭司長ザカリアと婚前性関係を結んだことは、善なる事であり正しい事であったと評価されている²⁹。筆者の見解では、そのような事件は状況倫理論の立場で事例状況別に正確な道徳的評価をすることができると考える。しかし、統一思想では神の摂理的目的、即ちメシアを迎える為の基台を樹立することによって神の創造目的を完成させるための目的を中心に道徳的評価をする。『原理講論』は神側とサタン側に分けて提示することによって、神側が行った事が非倫理的に見えたとしても、神の摂理の目的完成の為ならば正当化されると主張する。例えば、『原理講論』は、下記のように言及している。

天(神)の側とサタンの側との区別は、神様の復帰摂理の方向を基準として決定される。神の復帰摂理の方向と同一の方向を取るか、間接的でもこの方向に同調する立場をとるときこれを天の側といい、これと反対になる立場をサタンの側という。ゆえに天の側かサタンの側であるというのは、我々の常識や良心による判断と必ずしも一致するものとはいえないのである。モーセがエジプト人を殺したという事実は、神の摂理を知らない人は誰でも悪だと言うであろう。しかし、復帰摂理の立場で見ればそれは善であった。そればかりでなく、イスラエル民族がなんの理由もなくカナンの地へ侵入して数多くの異邦人を全滅させたという事実も、神の摂理を知らない立場から見れば悪だと言わざるを得ない。しかし、これもやはり、復帰摂理の立場から見れば善であったのである。⁶⁰⁾

このように統一思想は神様の摂理を中心に善と悪を判断する。したがって統一思想の立場、すなわち、少なくとも上で引用した歴史解釈の立場では、目的論的倫理論とルールを同じくするものにみえる。しかし、目的論的倫理論や状況論的方法論によって行為を判断した結果は、道徳的結論としてみると、互いに同じものに見える。筆者は状況倫理論と義務論的倫理論の間の葛藤は、目的論的倫理論と義務的倫理論の過去の葛藤様相と同じく、本然の世界が成され、全ての人が本心に従って行動するようになれば自然にな

せよ。Fletcher もこのような用語を状況倫理論と同じ意味で使用した。Fletcher, Situation Ethics, p. 29 を参考にせよ。

²⁷ Jean Porter, Moral Action and Christian Ethics (Cambridge : Cambridge University Press, 1955), p. 10.

²⁸ 『統一思想要綱』にはカント、ベンサム、分析哲学、実用主義の既存の倫理論を評価する部分がある。統一思想研究院, 『統一思想要綱』, pp. 403-415 を参照。

²⁹ マリアが祭司長ザカリアと性的な関係を結んだ内容に関する「文鮮明先生の御言」は、True Family and World Peace : Speeches by the Reverend and Mrs. Sun Myung Moon in the Completed Testament Age (New York : HSA Publications, 2000), pp. 53-54, “View of the Principle of the Providential History of Salvation” ; 文鮮明, 『真の家庭と世界平和』〔東京:世界平和統一家庭連合、2000〕、「救援摂理史の原理観」などを参照せよ。

⁶⁰⁾ 世界キリスト教統一神霊協会, 『原理講論』, p.541

くなるであろうという見解を付け加えたい。

5. 統一思想の観点からみた人格倫理論

人格倫理論 (character ethics) は良い人格、または人徳 (virtue) を形成する事が、道徳的判断をなす場合において、最も重要な考慮すべきことであると主張する倫理論だ。人格倫理論は、徳目倫理論 (virtue ethics) とも言う。人格倫理論は、その他すべての既存の倫理論 (例：義務論的倫理論、状況倫理論、目的論的倫理論) が決定と行動に主眼点をおいたことを間違っただけと判断する。人格倫理論者たちは、倫理論は行動に焦点を合わせるのではなく、行動する人の人格に焦点を合わせなければならないと主張する。多くのプロテスタント人格倫理論者たちはまた、理性と知性を強調した啓蒙思想に批判的な立場をとり、感情と情緒に主眼点を置くべきであると強調する。嘘をつくという問題に関して考えてみると、人格倫理論の立場では、行動自体が重要な事ではなく、人格形成が重要だと見る。良い人格を持っている良い人を養成することが最も重要だというのである。人格倫理論の支持者達は“良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を、結ぶようになっている (マタイ 7:17)”という聖書の言葉をよく引用する。したがって最近における人格倫理論の登場は、倫理学分野の強調点に大きな変化があることを反映する。

Burtneiss によれば、人格倫理論、すなわち徳目倫理論は「その根源はアリストテレスまで遡るが、1970年代においては、多くの倫理学書籍の中で一つの特定の倫理論的立場としては、公式的に含まれない場合が多かった。⁶¹⁾ しかし、Burtneiss は1999年に出版した著書の中で、「現在、人格倫理論は、倫理学に関心のある人ならば誰もが無視できない主要選択項目に浮上した」⁶²⁾ と強調した。そして、1980年代以来の人格倫理論の中央舞台への登場と人気は、「道徳哲学とキリスト教倫理学の分野において勢いを強めている静かな革命」として表現されている。³⁰⁾ 哲学的倫理学者たちとローマカトリック倫理学者たちは、この人格倫理論を“徳目倫理論”と呼び、プロテスタント系の倫理学者たちは、これを“人格倫理論”と呼ぶ傾向がある。多くの哲学的倫理学者たちとローマカトリックの倫理学者たちは、アリストテレスやトマス・アクィナスの影響を強く受けている場合が多い。アリストテレスやトマス・アクィナスはみな、徳目を育てることが重要だと強調した。アリストテレスは、知恵、正義、勇氣、節制の4つを主要徳目として提示した。このような哲学的徳目にアクィナスは、信仰、希望、愛という3つの神学的徳目を追加した。⁶³⁾

前述したように、アリストテレスの倫理論は、主に目的論的倫理論に分類されてきたが、幸福 (eudaimonia) が究極的な目的であり、人間はこの目的を指向していると見たためである。しかし、アリストテレスの倫理論には人格倫理論 (徳目倫理論) の要素も内包されている。アリストテレスは、幸福 (eudaimonia) を“徳目に合致した靈魂の活動”と定義した。⁶⁴⁾ 彼は人間の幸福の核心要素の中のひと

⁶¹⁾ Burtneiss, *Consequences*, p.83

⁶²⁾ *Ibid.*, p.83

³⁰⁾ Romanus Cessario, *The Moral Virtue and Theological Ethics* (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1991), the back of the book cover.

⁶³⁾ アクィナスの倫理的観点は、自然法を強調した点により義務論的倫理説に分類される場合が多い。しかし、徳目倫理論を擁護する一部の学者たちは、彼の倫理論には徳目の重要性を強調する面があるため、自然法の倫理論者〔義務論的倫理論者〕ではなく、徳目倫理論を代弁する者に分類されなければならないと最近では主張している。Daniel M. Nelson, *The Priority of Prudence: Virtue and Natural Law in Thomas Aquinas and Implications for Modern Ethics* (University Park: Pennsylvania State University Press, 1991)を参照せよ。

⁶⁴⁾ David Ross, *An Introduction to The Nicomachean Ethics* by Aristotle, trans. David Ross (Oxford: Oxford University Press, 1980), p.vii.

つは、徳行の生活をすることであるが、徳目を実践することにより、人徳が身に付いた人になると主張した。彼は徳目を“人格の一つの状態”、もっと正確に言えば、両極端の間にある“中庸状態”であると言った。結果として、彼は人間が徳目を実践する習慣を取り入れ、人格を発展させることが、とても重要だと主張した。⁶⁵⁾

今日、影響力のある人格倫理学者たちには Gilbert Meilaender, Stanley Hauerwas, James McClendon などがいる。⁶⁶⁾ 1981 年に出版された Alasdair MacIntyre の著書 After Virtue もまた徳目倫理論の浮上に貢献した。この本で彼は、アリストテレスのように徳目に対する関心を取り戻すことを提唱し、啓蒙主義の思潮の影響を強く受けた「情緒的倫理説」(emotive theory) のような理性的で虚無主義的な倫理分析論を批判した。⁶⁷⁾

人格倫理学者たちのなかの一部は、「ナレーティブ倫理学者」とも呼ばれる。⁶⁸⁾ ナレーティブ倫理学は、人格倫理学の一部分として理解することが出来る。1970 年以後、伝統的な合理的倫理論に対する反作用でナレーティブ倫理学が浮上した。伝統的な合理的倫理論は、啓蒙思想が強調した合理性、および決定と行動に強調点をおいていた。ナレーティブ倫理学者たちは、人格形成に主眼点をおき、感動的なストーリーや説話が人格形成に大きな影響を与えるという事実を直視した。ナレーティブ倫理学者たちは、倫理や道徳を、合理的で知的なことを根拠にして分析すれば、人が温かい愛を実践し、正しいことを実践するようになるという見解に反対した。彼らは良い人格を持った人を形成することが、より根本的なことであり、重要であると見たのであり、人格は頭で理解されるものではなく、心の琴線を泣かせる感動的な話を通して発現され、成熟することが出来るを見た。

ナレーティブ倫理学者たちはまた、個人だけでなく共同体もまた、そのような感動的な話を通して性格が形成され、維持され発展することが出来ると強調した。ナレーティブ倫理学を広く流布するのに最も大きな影響を及ぼした Hauerwas によれば、キリストとその使徒たちの感動的な話と聖書の感動的な話は、キリスト教徒たちの人格形成と発展に影響を及ぼし、キリスト教徒たちが、キリスト教共同体に帰属意識を持たせるようにもする。彼の見解によれば、合理的な倫理論の立場で知的・理性的な教育に重点をおくことよりは、情緒的に感動を与える話を通して、キリスト教共同体の人格を涵養することがキリスト教的愛を

⁶⁵⁾ アリストテレスの倫理論の理解のためには Ibid., pp.v-xxviii; Aristotle, The Nicomachean Ethics, trans. David Ross (Oxford: Oxford University Press, 1980)などを参照せよ。

⁶⁶⁾ Gilbert Meilaender, The Theory and Practice of Virtue (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1984), Friendship: A Study in Theological Ethics (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1981); Stanley Hauerwas, Character and the Christian Life (San Antonio: Trinity University Press, 1975), A Community of Character (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1981), The Hauerwas Reader, edited by John Berkman and Michael Cartwright (Durham: Duke University Press); James McClendon, Biography as Theology (Nashville: Abingdon Press, 1974), Ethics: Systematic Theology, Vol.1 (Nashville: Abingdon Press, 1987)などを参照せよ。

⁶⁷⁾ Alasdair MacIntyre, After Virtue: A Study in Moral Theory (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1981)を参照せよ。人格倫理論の分野でその他、注目に値する著書としては、Romanus Cessario, The Moral Virtues and Theological Ethics (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1991); Rosalind Hursthouse, On Virtue Ethics (Oxford: Oxford University Press, 1999); Lewis B. Smedes, A Pretty Good Person (San Francisco: Harper, 1991); Jean Porter, The Recovery of Virtue: The Relevance of Aquinas for Christian Ethics (Louisville: Westminster John Knox, 1990); Nelson, Priority of Prudence などがある。

⁶⁸⁾ Hauerwas と McClendon は読者たちからは「人格倫理学者」よりは、「ナレーティブ倫理学者」と呼ばれる場合が多いようである。McClendon は、筆者が米国のバークレーにある Graduate Theological Union の大学院生時代、筆者の修士論文の指導教授の一人だったが、筆者はナレーティブ倫理学の方法論に深く共感した。

実践し、正しいことを行う人を養成するのに適している。⁶⁹⁾

『統一思想要綱』の倫理論には、人格倫理論を評価する部分がない。ナレーティブ倫理学に関する部分もない。従って、統一思想の倫理論では人格倫理論をどのように見ているのか、確実に知ることはできない。しかし、筆者は人格倫理論が、統一思想の倫理論と相通する面があると確信する。マルクス主義やスコラ哲学主義のようなその他の思考体系と比べてみると、統一思想は知識・知性よりは、心情と情緒に強調点を置いている。統一思想の教育論を見ても、人格と心情を重要視しているという点を把握することが出来る。⁷⁰⁾ 統一思想の教育論では、理想的な教育を扱いながら“心情教育”“規範教育”“主管教育（知識教育、技術教育、体育教育）”の3つの形態を提示している。統一思想の教育論によれば、心情教育は最高の人格を涵養することが目的である。理想的な教育を受けた人間像、すなわち“人格者”の姿は次のように描写されている。

人格者とは心情教育によって形成される人間像である。したがって人格者教育とは、被教育者をして神の心情を体じゅつし、日常生活において神の愛を実践するよう指導し、人格者として市育であるための教育である。心情は愛の源泉であり、人格の核心である。心情が乏しければ、いくら知識をたくさん持っていて、いくら体力があっても、いくら強大な権力があっても、人格者とはならない。世俗的概念では、人格者とは一定の徳性と知識と健康を備えた人間を言うのであるが、統一思想において、人格者とは神の心情を体じゅつし、愛を実践する人を言うのである。⁷¹⁾

さらに、統一思想の教育論は、神の三つの心情を提示している。“希望の心情”“悲しみの心情”“苦痛の心情”がそれであり、感動的な神様の話を提示することにより、神の三つの心情の内容を記述する。また、『統一思想要綱』によれば、心情教育を通して子女たちは、前述した神の三つの心情、特に、復帰摂理の過程での神の心情（苦痛の心情）を理解すると述べ、要約されたストーリーを通して、アダム家庭、ノア家庭、アブラハム家庭、そしてモーセ路程とイエス路程を見つめる神の心情を提示した。⁷²⁾ したがって、統一思想には人格倫理論、およびナレーティブ倫理学と相通する面があることを知ることが出来る。もう少し正確に言えば、人格倫理論（ナレーティブ倫理学）は、伝統的な知識教育中心の倫理論に批判的であり、感動的な話を通した人格教育を擁護する。そのため人格倫理論（ナレーティブ倫理論）は、“人格者”形成を目標とする統一思想の“心情教育”にととても似ている。

筆者の批判的観点で見るとき、人格倫理論者たちは、よい性稟をもつ人間を形成することが重要だという見解には同意しているが、人格倫理論者たちが、よい人格として、万人が一致共感できる人格内容を提示できないでいる点を指摘したい。Hauerwas も彼のナレーティブ倫理学に染み付いている“分派主義的”傾向により批判をたくさん受けたが、それは地球次元はおろか、一国の社会全体が受け入れることができる理想的な人格者像を形成する問題をも疎かにしたためである。⁷³⁾ Hauerwas の見解はいわばこのようなものだ。キリスト教徒たちは、イエスを中心とした聖書の感動的な話を基準にして、真実なキリスト教徒としての人格を持つ個人と共同体を形成することに関心を傾けなければならない。ユダヤ教徒たちは、モーセを中心としたヘブライ經典の感動的な話を基準に、真実なユダヤ教徒としての人格をもつ個人と共同体

⁶⁹⁾ Hauerwas, Community of Character を参照せよ。

⁷⁰⁾ 『統一思想要綱』の教育論に関しては統一思想研究院、『統一思想要綱』を参照せよ。

⁷¹⁾ Ibid., p. 371.

⁷²⁾ Ibid., pp. 354—363.

⁷³⁾ Burtneis, Consequences, p. 88 を参照

を形成することに関心を傾けなければならず、イスラム教徒は、コーランの感動的な話を基準に、真実な回教徒としての人格をもつ個人と共同体を形成することに関心を傾けなければならない。換言すれば、Hauerwas の人格倫理論（ナレーティブ倫理学）は、倫理的多元論に陥る危険性を内包している。Hauerwas は、キリスト教徒たちが社会全体を変革する努力をすることに対して批判的であり、世の中と隔離されたキリスト教徒たちで構成されたエリート共同体の維持を提唱する。したがって彼は、道徳的価値に関して見解を違える人たちが、民主主義的に道徳的価値に関して論議する過程に参加することを妨害する、という理由で批判を受けている。⁷⁴⁾

プロテスタント系のナレーティブ倫理学者たちとは違い、哲学的徳目倫理論者たちとローマ・カトリック教会系の徳目倫理論者たちの立場は、普遍的に良いと認められるべき徳目と人格を提示しているアリストテレスとトマス・アクイナスの見解に基づいて、普遍的に善なる人間の人格と徳目を追求する面がある。それにも関わらず、筆者の個人的な判断では、彼らが提示している良い人格と徳目を備えた人間像よりは、統一思想で提示している“人格者”の方が、はるかに満足できるものに見える。⁷⁵⁾

6. 統一思想の観点から見た道徳率廃棄論的な倫理論

道徳率廃棄論的な倫理論 (antinomian ethics) は、倫理道徳というものは単純な個人的な信念に過ぎず、客観的普遍的に適用できる善悪の基準はないと主張する倫理論である。⁷⁶⁾ 普遍的な善と悪の基準があることを否定する倫理論は数多くあるが、道徳率廃棄論的な倫理論は、普遍的な善悪の基準がある事を否定する複数の倫理論によって成り立っていると言うのがより正確であるだろう。道徳率廃棄論的な倫理論に属する倫理論の中には、情緒主義 (emotivism)、文化相対主義 (cultural relativism)、主観主義などがある。⁷⁷⁾

“文化相対主義”は、善と悪の基準は文化によって違うと主張する倫理論である。“善である”という事は、与えられた文化の中で“社会的に容認される”という事を意味するため、道徳的基準は該当文化の基準によって決定される。⁷⁸⁾ したがって文化相対主義は、普遍的な善悪の基準があるという点を否定する。人類学者達は大概、文化相対主義を支持している。一方、“主観主義”は私達の道徳的判断は、私達の受け止め方によって変わってくると主張する倫理論だ。“善である”という事は“それを好む”という意味

⁷⁴⁾ Hauerwas と MacIntyre の倫理的観点に対する鋭い批判に関しては Jeffrey Stout, *Ethics After Babel* (Princeton: Princeton University Press, 2001) を参照。新しく添加された著者の追記が特に有益だ。

⁷⁵⁾ それは統一思想で説明する“人格者”が、哲学的倫理学やローマカトリックの倫理学で説明する“人格または徳目を備えた人間”よりはるかに心情的であるからだ。理想の人格者が理性的な面よりも、心情的な面の発達が必要である理由を、ここで全て説明することはできない。ただ、ナレーティブ倫理学が、啓蒙主義的な理性と知性を批判するという面に、筆者は共感すると言いたい。

⁷⁶⁾ Geisler 及び Fletcher が‘道徳率廃棄論’を倫理学を分類する時に使用した。彼らの分類範疇によって、筆者もやはり“道徳率廃棄論的な倫理論”を倫理学の一分野として言及した。Fletcher は倫理学を律法主義 (legalism)、状況倫理 (situationism)、道徳率廃棄論 (antinomianism) の3分野に分類した。Fletcher, *Situation Ethics*, pp. 17-39 を参照せよ。倫理学に関する Geisler の分類に関しては Geisler, *Christian Ethics* 及び 上の内容を参考せよ。しかし筆者が“道徳率廃棄論的な倫理論”と称する理論の実践者達は、自らをそうに呼んではいない。ある学者達は倫理分野での道徳率廃棄論を“無道徳主義 (amoralism)”として、その理論を支持するもの達を“無道徳主義者 (amoralist)”と呼んだりしてる。Bernard Williams, *Morality: An Introduction to Ethics* (New York: Harper Torchbooks, 1972) 及び Richard Garner, *Beyond Morality* (Philadelphia: Temple University Press, 1994) を参照せよ。

⁷⁷⁾ 文化相対主義、主観主義、情緒主義に関する説明は Harry J. Gensler, *Ethics: A Contemporary Introduction* (London: Routledge, 1998) を参照せよ。

⁷⁸⁾ 哲学的倫理学者達の中では、文化相対主義を支持することは極めて少ない。そのような倫理論は、究極的には、有色少数民族に対する白人たちによる差別主義や人種主義を支持する事になるという理由も部分的には影響している。文化相対主義に関する内容は John W. Cook, *Morality and Cultural Differences* (New York: Oxford University Press, 1999) などを参考せよ。

である。行為に対する道徳的評価は、それに対する感情によって変わってくる。よって主観主義は個人によって偏差がひどく、そして善悪の普遍的な基準を否定する。情緒主義的倫理論が、主観主義の典型的な例であるとする事ができる。

一番影響力がある道徳率廃棄論的な倫理論は“情緒的倫理論”であり、M. Schlick と A. J. Ayer が代表的人物である。M. Schlick と A. J. Ayer は分析哲学で有名な学者として言語の論理的な分析、すなわち論理実証主義に力点をおいて研究した。Ayer は情緒的倫理論を定義して、このように言った。“道徳的判断は、技術的なものであるというよりは情緒的であるものとして、事実の技術でなく態度を表現したものである。したがって道徳的判断は真実にも偽りにもなることができず、真実と偽りの棒で判断しない時、かえってより明確になるのである。”⁷⁹⁾ 言い換えると彼は、“善は主観的な感情を表現する単語に過ぎないものとして客観的に確認する事ができないものだ。”⁸⁰⁾ と主張する。嘘に関して考えてみるならば、情緒的倫理論を支持する学者達は、“嘘を話すことが道徳的に受容する事ができないという感情を表現したことに過ぎないが為、それが真実だとか偽りだとか言う事はできないと言うであろう。”⁸¹⁾

統一思想は、善を何か定義できないものであると考え、客観的に判断できないと主張する分析哲学者達に対し、とても批判的な立場を取る。『統一思想要綱』では、情緒的倫理論のような道徳率廃棄論的な倫理論に対して、次のように批判する。

統一思想から見れば、善は明確に定義することができる。すなわち、人間は家庭的四位基台を通じて神の愛を実現するという明確な目的をもっているものであり、その目的にかなう愛の行為を心の意的機能で評価したものが善である。⁸²⁾

統一思想の倫理論は、確実に、本論文で見た6種の倫理論の中で道徳率廃棄論的な倫理論、を一番批判的に見ている。情緒的倫理論の場合から見る事が出来るように、道徳率廃棄論的な倫理論は、大部分が哲学的倫理論の領域に属する。しかし、道徳率廃棄論的な倫理論は最近同じ哲学的倫理学者たちからも攻撃を受けて、斜陽の道に入ったものと思われる。これは1980年代以後、哲学的倫理学者、または道徳哲学者達の間で、徳目倫理学がより多くの関心を受けている事を見ても知ることができる。⁸³⁾

IV. 結論： 倫理学に対する統一思想の関連性

本論文の一番目のセクションでは、統一思想の倫理論を新たに体系化するために、既存の『統一思想要綱』に提示されている理論の限界点を見直し修正拡張してみた。二番目のセクションでは、倫理学の内容の性格、善悪決定の方法論、主題分野、研究者別類型などを中心として倫理学を分類してみた。三番目のセクションでは、統一思想の観点から倫理学を代表する六種類の倫理論を提示してそれらの有効性を評価してみた。この結論部分では、倫理学に対する統一思想の関連性・妥当性を評価してみる事にする。

倫理学の分野は、いまだに整えられておらず、お互い一致しない点も多くある。特に、善悪決定の方法

⁷⁹⁾ A. J. Ayer, “On the Analysis of Moral Judgment,” *Horizon* 20 (1949); Reprinted in his *Philosophical Essays* (London: Macmillan, 1954), p. 246; Quoted in Sahakian, *Ethics*, p. 212.

⁸⁰⁾ 統一思想研究院、『統一思想要綱』、p. 410.

⁸¹⁾ Ibid.

⁸²⁾ Ibid., p. 411.

⁸³⁾ 例えば MacIntyre, *After Virtue* を参照せよ。

論の有効性に関しては、意見が分裂している。筆者は、統一思想が倫理学分野の方向を導き、倫理学の難しい問題を解決する糸口を提供する事の出来る優れた資源であるという事が、より一層確実になった。セクションⅢで言及したように、統一思想は基本的に目的論的倫理論、結果論的倫理論、人格倫理論などを支持する事が出来るが、単に支持するだけでなく、それらの各倫理論を改善し洗練化し明確化することができる。人間の究極的目的は、神の創造目的を完成する事、即ち3大祝福を完成し理想家庭を中心として地上天国と天上天国を創建する事である事を明確にする内容は、目的論的倫理論を改善洗練化する部分である。統一思想は更に結果論的倫理論も改善洗練化している。究極的な善の結果はやはり、神の創造目的を完成する事、即ち3大祝福を完成し理想家庭を中心として、地上天国と天上天国を創建することである。即ち、結果論的倫理論は、方法論的に目的論的倫理論に属するので、最善の目的と最善の結果は一致することになる。

率直に言うと、筆者は倫理学者達が、最近浮上する人格倫理論に対して大きな関心を持っている事に強い感銘を受けている。統一思想は、教育論で“人格者”像を明確に提示する事によって、人格倫理論を補完する。統一思想は更に、神と関連して心の琴線に触れるたくさんの感動的話を提示する事によって、ナレーティブ倫理学 (narrative ethics) を補完したりもする。統一思想で提示する神は、排他的な特定共同体の分派的な神ではなく、宇宙的次元の父母であられる創造主である。したがって、Hauerwas のナレーティブ倫理学が持っている“分派”的な傾向から逃れて、宗教、民族、人種の障壁を超越した地球次元の人間共同体の創造に貢献することができる。統一思想の倫理論の視覚で見ると、人格倫理論は目的論的倫理論の一形態として、人格者形成を一番重要な徳目として提示していると見ることができる。人格、又は徳目形成は、他でもない第一祝福の完成（個人完成）であるので、統一思想もやはりそのような人格倫理論に基本的に同意することができるのである。

Hauerwas が最近、基督教徒の道徳的生活において、“t e l o s (目的)”を理解する事が重要だという点を認識し始めたということは注目に値する。⁸⁴⁾ 彼は“道徳的人生、特に基督教徒の道徳的人生の為に、人間の存在に対する目的論的概念が必要だ。”⁸⁵⁾と述べている。また彼は、自分の昔の理論の短所を認定して次のように述べている。

基督教徒の人生における目的論的要素に対する説明が抜けた結果、多少風変わりなカント的趣向が反映されたものとなり、Character and the Christian Lifeには、そのような痕跡が今も変わらず残っている。人格に関する私の説明は、時折、人格に関するカントの説明のように見えるように感じられる。即ち、人間が統一性のある人生を追求する事は、人間が向かっている方向を知っているからではなく知らないが為なのであると感じられるのである。⁸⁶⁾

したがって H a u e r w a s は “人格を幸福と友情の問題とは別にして考えない事が、なぜ大変に重要なのか”説明している。⁸⁷⁾ そうして基督教徒の人生の中で“t e l o s”〔目的〕が重要であるという事を認識した彼は、人格倫理論と目的論的倫理論との間の統合を意図しているものと見える。

プロテスタント系のナレーティブ倫理学、又は人格倫理論が持っている短所を詳しく見るならば、教会

⁸⁴⁾ Hauerwas, Hauerwas Reader, pp. 83-89 を参照せよ。

⁸⁵⁾ Ibid., p. 87.

⁸⁶⁾ Ibid., pp. 87n-88n.

⁸⁷⁾ Ibid., p. 87.

共同体の人格形成を試みようとする目的があるにはあるのだが、理想家庭を形成するのに必要な心の琴線に触れる話が欠如している。それは新約聖書には、夫と妻が模範として従える感動的な話がないからである。イエスは結婚した事がないために弟子達に結婚生活に対する生活を強調しなかった。アリストテレスとトーマス・アクィナスの徳目倫理論もまた、社会での個人の徳目、個人間の友情などを提示しているが、家庭で守るべき徳目、即ち夫と妻、父母と子女、兄弟姉妹の間での道理が提示されていない。人間関係の徳目を提示するという面で、アリストテレスとトーマス・アクィナスの道徳と倫理も共同体や人間共通の徳目を言っていると見ることが出来るが、原子論的な個人間の友情を強調するに終わってしまうだけである。即ち、西洋の倫理論には、人間関係における格位の概念がない。よって筆者の考えでは、ナレーティブ倫理論と人格倫理論（徳目倫理論）は、私達の重要な道徳的指標の部分として理想的な家庭を築く為の人格を強調し、家庭構成員の格位と徳目を強調する新しいパラダイムの開発が必要であると見る。

これとは対照的に、統一思想は理想的な個人の人格形成（個性完成）を強調するだけでなく、理想家庭形成（家庭完成）も合わせて強調している。理想的な家庭を築き、家庭で神の愛を実現する事が即ち‘第二祝福’を完成する事として神の創造目的に符合ことであり、宇宙的な善の重要な一部だという点を強調する。よって、主に原子論的個人（atomistic individuals）に基付いて、格位概念に欠けた西洋の倫理的観点とは違い、統一思想は各個人が家庭で特定の格位（例えば、子女、夫又は妻、父又は母、祖父又は祖母）を占めながら、互いに補完的で依存的な関係を維持することを強調する。統一思想は、人間が互いに依存的な関係で連結されているという点を強調しながら、私達は“連体”としての意識、即ち主体としての意識と同時に、対象としての意識を共に持つべきであるという点を強調する。更に、友達と同じ対等な人間関係、即ち横的な関係を強調する西洋の倫理的観点とは違い、統一思想の倫理論では横的な人間関係のみならず、父母と子女の関係のような縦的な人間関係もやはり重要な倫理的部分として強調する。したがって統一思想は、人間関係を見る西洋の倫理的観点が持つ、個人主義的（原子論的）で横的で主体的である傾向を矯正することが出来る。

一方、目的が手段を正当化するという考えに反対する立場から、多くの基督教徒達は義務論的倫理論を支持した。したがってエサウの弟ヤコブ、ユダの嫁タマル、イエスの母マリアなど、偽りを手段とした聖書の主要人物達の行為に対して道徳的判断をすることが出来る基準が曖昧である。⁸⁸⁾これとは違い統一思想は究極的目的、即ち結果を成す事が何かを明確に明かす事によって、目的論的倫理論と結果論的倫理論を後押しし、これを基準として聖書の中心人物達の行為に対する道徳的判断を可能にするのである。

しかし筆者が見るに、統一思想は未来における義務論的倫理観には、反対的ではない。統一思想が、いわゆる墮落した世界から過去の人物達が行ったことに対し道徳的判断をする方法論としては、義務論的倫理に対しては批判的であることは事実である。しかし、統一思想は神を中心とした本然の世界が復帰され、個人の人格が本心に従いつつ“天法”を遵守して公共の善を実現する日の到来を予見している。言いかえると、統一思想によれば義務論的方法と目的論的方法が正しい目的を悟り、互いに相衝突する面が解消される日が来るということである。

前のセクションで言及したように、統一思想は道徳率廃棄論的倫理論に対しては非常に批判的である。MacIntyre と Hauerwas の主張や人格倫理論（徳目倫理論）が最近浮上したことを見ても分かるように、情

⁸⁸⁾ 聖書の中心人物達が、嘘をつかねばならなかった理由に関しては、文鮮明&韓鶴子、『真の家庭と世界平和』（東京：光言社、2000）に収録されている「救援摂理史の原理観」や Jin Moon Kim, Fountain of Life: Based on the Words of Reverend Sun Myung Moon (New York: HAS-UWC, 1993), p. 242 などを参照せよ。

緒主義 (e m o t i v i s m) のような理性主義的で虚無主義的な道徳的分析理論を量産した啓蒙主義思潮の強い影響に対し批判する学者達の声が強まっている。統一思想は、道徳率廃棄論的な倫理論に対する批判に大きく貢献するものと思われる。幸いにも、道徳率廃棄論的な倫理論は、最近数年間、減少趨勢にあるのだが、統一思想はそのような倫理論の衰退を促進する事が出来ると見る。

状況倫理論は、対立と闘争が乱舞する墮落した世界で通用する倫理論である。フレッチャーが『状況倫理』で言及したほとんど全ての事例研究は、対立状況、さらには戦争状況と関連している。愛国心が強いアメリカ人女性が、性 (s e x) を手段としてヨーロッパの共産主義者スパイを誘惑することが罪になるのか、第二次世界大戦末期に、ロシアで捕虜として収容されているドイツ人の三児の母が妊娠したら収容所から早く解放されることを知り、夫と幼い三人の子供たちに早く会おうとする目的で守衛と姦淫をした事が罪になるか、第二次世界大戦の渦中に、広島に原子爆弾を投下するよう決定したアメリカの大統領と軍関係者達の決定が罪になるか、などがそのような例の中の一部である。⁸⁹⁾ 統一思想は過去に道徳的義務が混乱していた事は人間の祖先の墮落によって善と悪の間に闘争が展開されて来た為であると明確に説明している。⁹⁰⁾ したがって状況倫理は、調和のとれた平和世界が築かれれば無用なものになり不適合な理論となるであろう。

このように統一思想は、多様な倫理論の短所と長所を指摘し、倫理論の間の関係を明確化させることに役立つ。統一思想はまた、倫理学理論の分野で、目的論的倫理論、結果論的倫理論、人格倫理論、義務論的倫理論などの未来像を提示するのに役立つのである。⁹¹⁾ この論文が、倫理学分野に対する統一思想の関連性と貢献可能性を明確化する上で役に立ったことを願うものである。

Bibliography

⁸⁹⁾ Fletcher, Situation Ethics, pp. 163-168.

⁹⁰⁾ 統一思想では、人類歴史が善悪の闘争歴史であると見ており、さらに罪がない本然の世界に復帰する過程であると見ている。統一思想の歴史観に対しては統一思想研究院、『統一思想要綱』、pp. 498-502 を参照せよ。

⁹¹⁾ 最近数年間多くの学者達が倫理学を統合しようと努力している。例として、David Cumiskey, Kantian Consequentialism (New York: Oxford University Press, 1996)などを参照せよ。

- Aristotle. The Nicomachean Ethics. Trans. David Ross. Oxford: Oxford University Press, 1980.
- Ayer, A. J. Language, Truth, and Logic. London: Victor Gollancz, 1936.
- _____. "On the Analysis of Moral Judgment." Horizon 20 (1949).
- Bentham, Jeremy. The Principle of Morals and Legislation. New York: Prometheus, 1988.
- Burtress, James H. Consequences: Morality, Ethics, and the Future. Minneapolis, MN: Augsburg Fortress Publishers, 1999.
- Cessario, Romanus. The Moral Virtues and Theological Ethics. Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1991.
- Cook, John W. Morality and Cultural Differences. New York: Oxford University Press, 1999.
- Cox, Harvey, ed., The Situation Ethics Debate. Philadelphia: Westminster, 1968.
- Cummiskey, David. Kantian Consequentialism. New York: Oxford University Press, 1996.
- Fletcher, Joseph. Situation Ethics: The New Morality. Philadelphia: Westminster, 1966.
- Frankena, William K. Ethics. 2nd ed. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall, 1973.
- Garner, Richard. Beyond Morality. Philadelphia: Temple University Press, 1994.
- Geisler, Norman L. Christian Ethics: Options and Issues. Grand Rapids, Michigan: Baker Book House, 1989.
- Gensler, Harry J. Ethics: A Contemporary Introduction. London: Routledge, 1998.
- Gill, Robin. A Textbook of Christian Ethics. 2nd ed. Edinburgh: T & T Clark, 1995.
- Hancock, Roger N. Twentieth Century Ethics. New York: Columbia University Press, 1974.
- Hauerwas, Stanley. Character and the Christian Life. San Antonio: Trinity University Press, 1975.
- _____. A Community of Character. Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1981.
- _____. The Hauerwas Reader. Edited by John Berkman and Michael Cartwright. Durham: Duke University Press, 2001.
- Hauerwas, Stanley, and Charles Pinches. Christians among the Virtues: Theological Conversations with Ancient and Modern Ethics. Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1997.
- Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity. Exposition of the Divine Principle. New York: HSA-UWC, 1996.
- Hursthouse, Rosalind. On Virtue Ethics. Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Kim, Zin Moon. Fountain of Life: Based on the Words of Reverend Sun Myung Moon. New York: HSA-UWC, 1993.
- Lehmann, Paul. Ethics in a Christian Context. London: SCM, 1963.
- McClendon, James Wm. Biography as Theology. Nashville: Abingdon Press, 1974.
- _____. Ethics: Systematic Theology, Vol. 1. Nashville: Abingdon Press, 1987.
- MacIntyre, Alasdair. After Virtue: A Study in Moral Theory. Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1981.
- Meilaender, Gilbert. Friendship: A Study in Theological Ethics. Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1981.
- _____. The Theory and Practice of Virtue. Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1984.
- Moon, Sun Myung. Reisetsu-to Gishiki (Proper Manners and Rituals). Tokyo: Kogensha, 1999.
- _____. True Family and World Peace: Speeches by the Reverend and Mrs. Sun Myung Moon in the Completed

- Testament Age. New York: HSA Publications, 2000.
- Nelson, Daniel Mark. The Priority of Prudence: Virtue and Natural Law in Thomas Aquinas and the Implications for Modern Ethics. University Park: Pennsylvania State University Press, 1991.
- Ostwald, Martin. An Introduction to The Nicomachean Ethics, by Aristotle, translated by Martin Ostwald. Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1962. Pp. xi-xxvi.
- Porter, Jean. The Recovery of Virtue: The Relevance of Aquinas for Christian Ethics. Louisville: Westminster John Knox, 1990.
- _____. Moral Action and Christian Ethics. Cambridge: Cambridge University Press, 1995.
- _____. Natural and Divine Law: Reclaiming the Tradition for Christian Ethics. Grand Rapids, Michigan: Eerdmans, 1999.
- Ross, David. An Introduction to The Nicomachean Ethics, by Aristotle, translated by David Ross. Oxford: Oxford University Press, 1980. Pp. v-xxviii.
- Sahakian, William S. Ethics: An Introduction to Theories and Problems. New York: Barnes & Noble Book, 1974.
- Smedes, Lewis B. A Pretty Good Person. San Francisco: Harper, 1991.
- Stevenson, C. L. Ethics and Language. New Haven: Yale University Press, 1944.
- Stout, Jeffrey. Ethics After Babel: The Languages of Morals and Their Discontents. Princeton: Princeton University Press, 2001.
- Unification Thought Institute. Essentials of Unification Thought: The Head-Wing Thought. Tokyo: UTI, 1992.
- Williams, Bernard. Morality: An Introduction to Ethics. New York: Harper Torchbooks, 1972.